

『源氏物語』
—— 光源氏の栄華と予言 ——

The Tale of Genji — Hikaru Genji's
Fortunes and Prophecies —

金 鍾 徳*

It is widely known that the basic structure of the first part of The Tale of Genji consists of the fulfillment of the fateful prophecies of Hikaru Genji's fortunes. The present study examines the development of the tale in accordance with the prophecies in the 'Kiritsubo,' 'Wakamurasaki' and 'Miotsukushi' books, and addresses the questions of how the prophecies function in the narrative, how they determine the fate of the hero Hikaru Genji, and what forces underlie their fulfillment.

My starting point is to question the prevailing interpretation of the Korean physiognomist's prophecy which reads the whole meaning of the prophecy from certain of its parts, linking it directly to Genji's elevation to the rank of retired emperor in the 'Fujinouraba' book, or the Kiritsubo Emperor's decision to reduce Genji to the status of commoner, etc. Against this approach, I divide the prophecy into two parts, which taken together foretell Genji's fortunes as one who bears the physiognomy of an emperor and will rise to a rank above that of a vassal. Subsequently, the dream prophecy of the 'Wakamurasaki' book, closely bound to the deep structure of the Fujitsubo affair, may be read as lending greater substance to the earlier prophecy,

* KIM Jong Duck, 東京大学大学院博士課程

which foreshadows the structure of the narrative fiction. In other words, Genji's departure for Suma is a voluntary decision prompted by Fujitsubo's discretion and Genji's concern to see the crown prince (later Reizei Emperor) safely accede to the throne. Then, in the 'Miotsukushi' book, following Genji's recollection of an earlier astrological prophecy, we see the transformation of Genji into a political figure acting (as sekkan regent) on behalf of his three children and his own fortunes. In short, Genji does not simply attend upon the fulfillment of the prophecies but works conscientiously to insure their realization. There was a limit, however, on what Genji's efforts could achieve, and the highest glory, the true meaning of the prophecy, must wait until the 'Fujinouraba' book, when he is designated a retired emperor and receives visits by the reigning emperor and Suzaku-in at the Rokujōin.

In effect, Genji's career is governed by the three prophecies, but he does not wait passively for their fulfillment. The underlying principle of realization is his concerted effort together with the love of Fujitsubo and the filial piety of the Reizei Emperor. The logic of the narrative at work here appears to be the activity of the chief characters to insure that what is foretold will indeed come to pass.

1. 序

古代の文学作品に書いてある予言の意義について阿部秋生氏が「殊に古代傳承物語の場合には、殆ど絶対的な威力を発揮」^(注1) していると述べているように、予言は必然的かつ決定的に実現されるものであると思われる。問題は読み手が予言をどのような観点で解釈し、文脈の上に位置づけるかという点である。

『源氏物語』第一部の運命物語は光源氏の宿命的な予言の実現が基本構造をなしている。小論では、桐壺巻、若紫巻、落標巻に語られる三つの予言によって展開される運命物語を対象にして、予言が物語の中でどのような機能を果たし、主人公光源氏の栄華へと収斂されていくのか、また予言の実現原理は何で

あるかを予言の字義的な解釈に限定しないで、具体的な物語の展開と光源氏の人間関係を中心に考えて見たい。

従来の高麗人の予言の解釈は、藤裏葉巻の准太上天皇と直結するか、桐壺帝の賜姓源氏の決意など予言のある側面が予言全体の意味として解されたりしていた点に疑問を持ち出した。予言の真意は若紫巻の夢占い、潯標巻の宿曜の予言などと共に次第に解明されるべきものであった。したがって、予言の実現原理を藤壺の出家、光源氏の須磨退去、宿曜の予言を思い出した以後の光源氏の変貌、薄雲巻で出生の秘密を夜居の僧都から聞いた後、冷泉帝の実父光源氏への待遇などの人間関係の深層に注目することによって把握したいのである。

2. 高麗人の予言の真意

渤海国から派遣された国使の一人である高麗人の予言は、若宮の超人的な美貌、学問芸術の抜群の能力にもかかわらず、外戚の後見がないため親王宣下もなされずにいるころ、次のような状況で語られる。

そのころ、高麗人の参れるなかに、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは、宇多帝の御誠あればいみじう忍びて、この皇子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたび傾きあやしむ。相人^㉑「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。^㉒おほやけのかためとなりて、天の下輔弼くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。（桐壺巻 ①115～116、日本古典文学全集の巻冊数、頁数を示す。本文例以下同じ）

予言前後の場面設定は『宇津保物語』の俊蔭巻の冒頭と似ている。相人が不思議がった理由は、皇子が右大弁の子とは思われない特殊な人相であるばかりでなく、観相するのに複雑で難解さに苦心したからであろう。

相人の予言は^㉑前半と^㉒後半が二つの条件節「見れば」によって否定される文脈に言われている。予言の内容をめぐって、古注釈以来諸家による解釈がある。自説を整理するために多少無理はあるが結論から考えて、予言の前半と准

太上天皇と直結して解する説と、予言の後半と賜姓源氏を直結して解する説に分けて分析・考察して見よう。

最初に予言の前半に沿って准太上天皇と直結して解釈を下しているのは『花鳥余情』である。

くにのおよとなるとは六条院の太上天皇の尊号をえ給へることをいへりみ
たれうれふるとは須磨の浦へうつされ給へることもおほやけの御かためと
は摂政関白の天子を輔佐したてまつる事也源氏の君はつみに尊号を得給へ
りしかはおほやけの御かためにはその相たかふといふ也^(注2)

『花鳥余情』では「国の親」を准太上天皇、「乱れ憂ふる」を須磨流謫と解しているが、私は「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相」を天皇の位、「乱れ憂ふる」を国乱れ民憂ふると解する。予言の前半は「その親」になることと「乱れ憂ふること」が同時発生的に装置されている。つまり光源氏はいかに天皇に即位しなかったから、乱憂もおこらずにすんだのである。

『花鳥余情』の示唆を得て「国の親」の解釈を准太上天皇だとする説を再び主張したのは森一郎氏であった。森氏の高麗の相人の予言についての見解も「桐壺巻の高麗の相人の予言について」（『平安文学研究』第36巻、昭和41年6月）以来、最近の論文である「桐壺巻の高麗の相人の予言の解釈」（『青須我波良』、昭和58年7月）に至るまで随分変わっている。最近の論文（後者）では、「国の親」を天子、「乱れ憂ふる」は天のさとし、予兆することばと定義し、それは光源氏の宿世の実体であると述べている。そして森氏は「予言前半も後半も、実体的に“准太上天皇”をことばにし得ていると考える」^(注3)のように解している。予言の前半が「天子になるべきでない帝王の相」だとする論定は頷けるが、そこに“准太上天皇”の名称ではない実体がことばにせられているという点は私説と違う。光源氏の栄華の予言が実現されるまでには、その深層に藤壺事件がかかわることは確かだが、予言の解釈と准太上天皇は直結しない方がよからう。光源氏が天皇の実父、准太上天皇になったのは藤壺事件の結果であって、予言の段階では栄華の可能性が言われていると思われる。

本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』で、

源氏の君は、つひに天皇の御文にて、太上天皇の尊號を得給へれば、はじめより帝王の相おはせし也、然れどもまさしく帝位にはのぼり給はざれば、帝王の相は有ながらいささか闕たところの有しなるべし、(中略)これは花鳥の説ぞよろしかりける^(注4)

と解して、宣長も予言の前半と天皇の父准太上天皇を直結している。

以下予言の前半に重点をおいて解している論文を簡単に要点だけを整理しておく。

深沢三千男「高麗人予言(前半)の内に准太上皇となる宿世は言い当てられている」^(注5)

重松信弘、「予言は人臣の源氏に准太上天皇の殊遇を受けさすために、構えられた」^(注6)

三谷邦明「倭相の判断を確認する高麗人の相人の予言には、既に藤裏葉巻の准太上天皇即位という栄華の構想が語られている」^(注7)

玉上琢弥「帝王の位に昇るのである。ただし統治はしないのである。(中略)太上天皇に准する(譲位された天皇と同格)という待遇である。」^(注8)

木船重昭氏は予言が顕界においてはあくまでも実現せず、隠界において成就したとし、「かくて高麗人の観相の予言、“天子の父”“天子”は成就し、“天子の父”に表裏合体している」^(注9)と述べている。

藤井貞和氏は准太上天皇を予言の前半に直結はしていないが、「高麗の相人は藤壺事件を的確に言いあてている」^(注10)と解し、土方洋一氏も「相人の予言は光源氏の須磨退去や准太上皇の尊号を得ることよりも、実は藤壺宮との密通事件を目睫の標的として設定されている」^(注11)と解釈している。

高橋和夫氏は帝王の相である光源氏に対して、賢帝である桐壺帝は、「あえて高麗人の予言に挑戦し、もって民安かれと願ったのである」^(注12)と解釈し、予言とは必然的であって決定的ではないと述べている。

また予言は附帯的な確認としての記述にすぎないとし、「高麗相人の源氏観相は、爾後の物語展開に、関与するところがない」^(注13)と解しているのは塚原鉄雄氏である。

日向一雄氏は「非日常的な王権の実現が光源氏の所有した帝王相であった」とされ「准太上天皇位は光源氏の特異な王権を名実ともに完成するものであったのだ」^(注14)と述べておられる。

以上の諸説が予言の前半に重点をおいて解釈しているが、私見では予言の前半が「乱れ憂ふること」によって帝王の位が否定され、後半の「おほやけのかため」以上の無限の栄華の可能性を包括的に言いあてているのだと解する。

予言の後半に沿って、桐壺帝の政治的判断と賜姓源氏に重点をおいて『花鳥余情』に異を立てているのは『弄花抄』である。

大やけのかためと成給なはうれふる事の相はたがふへしと相しけるにや花鳥には大やけのかためと成給ふへき相とみれば又つゐに太上天皇の号を給へる故にその相にたかふといふ云々^(注15)

とあるように「おほやけのかため」となれば乱憂はおこらないと注しているが、『弄花抄』の解釈は明らかに過ちであると思われる。契沖や真淵も指摘しているごとく、「また」という言葉に注意すれば「たがふべし」が乱れ憂ふことの否定にはなれないだろう。

『岷江入楚』の「或抄」では初めから帝王の位にのぼると乱れ憂ふことがおこるが、天下輔佐の人臣として出発すれば乱憂の相がよくなるということで、その事情を桐壺帝が分って賜姓源氏にしたという折衷説まで登場した。北村季吟の『湖月抄』でも「師説」に「両説ともに用ふべしと云々」^(注16)と解している。

手塚昇氏は予言の後半の「おほやけのかため」を大臣大将とし、「又、その相たがふべし」とあって、「作者は藤原氏の摂政関白に取って代る。皇族出身の摂政関白光源氏を書いた」^(注17)と解している。

伊井春樹氏も賜姓源氏と予言の後半を直結して、「相人は明確に即位へのコースを否定し、『おほやけのかため』に光源氏の進むべき道のあることを示唆したのであった」^(注18)と述べて、後半を「柱石となって天下を輔佐する相に立つと、光源氏の運命はまた異なってくるとの見解であった」^(注19)と解釈している。

池田勉氏は「桐壺の巻の相人の語は、花鳥余情の注釈しているような、源氏の准太上天皇の一件を預言するものではなく、むしろ、帝に源氏賜姓のことを決意させる、その動機と根拠を指示する役割をはたしているもの」^(注20)と述べている。

この外にも論点は違うが具体的に予言を解しているのは、島津久基、^(注21) 藤村潔、^(注22) 秋山虔、^(注23) 坂本昇、^(注24) 清水好子、^(注25) 後藤祥子^(注26) などの緒論がある。それらの綿密な検討を前提としながら管見を整理して見ようと思う。

私が最初に予言を読んで疑問に思ったのは、予言は前後半とも否定されていて、臣下の道を歩む相でもないと言っているのに、なぜ桐壺帝は若宮を臣下に列して源氏にしたのであろうかという点である。一体予言の真意は何であらうか。『河海抄』の注にあげている観相の実例などを見ても予言が否定する表現で言われているものはない。しかし、高麗人の予言は前後半とも否定されている。すなわち予言の真意は直接相人の言葉には表現されていない裏面的な意味である光源氏の無上の栄華の可能性を言ったものと思われる。

桐壺帝が若宮を臣下に列し源氏にする過程は、①帝自身の倭相、②高麗の相人の予言、③政治的判断、④宿曜の名人の判断の四段階の判断資料をもとに決断している。帝は四回も確認をするくらい用心深く若宮の賜姓源氏を決意したわけであるが、勿論、決定的な引き金となったのは高麗の相人の予言である。つまり、桐壺帝の政治的判断が装填だとすると高麗人の予言は引き金となり、桐壺帝の決断による臣籍降下は発射のような仕組みになっている。

それでは予言の依頼者であった桐壺帝はどのように予言を解して、前後半とも否定されているのに、賜姓源氏の道を決意したのであろうか。予言の前半は、帝王の位にのぼる相だが、それには乱れ憂ふことがついておこるだろうと言っている。これは帝の倭相及び政治的判断と一致している。だから帝は予言を聞いて「相人はまことにかしこかりけり」と考え、賜姓源氏を決意するのである。予言の後半は、おほやけのかためとなって天下の政治を輔佐する臣下として見てもその相が違ふようですと言っている。すなわち、帝王の相はあるが帝位に即いたら乱憂がおこるし、だからといって臣下で終わる相でもないと言う。

帝王でも臣下でもないという一体何であろうか。つまり予言は臣下ぐらいでは終わらない。臣下以上の位にのぼる可能性を提示しているのではないだろう。これについては鈴木日出男先生の次の論文は私見に示唆を与えてくれた。

帝の決断は予言に単純に従ったというよりも時代の状況を的確に認識した上での判断であり、この皇子の運命の絶大なる可能性を信じ、その最大に開かれる途を選んだということであろう。予言の叙述でいえば「天の下を輔弼くる方に見れば、またその相違ふべし」の可能性に期待をかけたことになるが……(注27)

つまり、相人の予言を聞いた桐壺帝が「またその相違ふべし」という「可能性に期待をかけた」という点に注目すると、予言の真意も明らかにされると思われる。

高麗人の予言は光源氏の運命の範囲だけを漠然と暗示しているのであって、具体的には言っていない。光源氏が生きるべき運命の範囲を予言の前半と後半が一体となって規定しているのである。予言は両方とも否定されているから、そのある一方だけをとって全体の意味として解すると予言の真意でなくなる。予言の依頼者の桐壺帝もそれを解釈していたと思う。すなわち、若宮を親王にさせるか臣下にさせるかという瀬戸際に、高麗の相人が天皇の道はいけないが、臣下にしても臣下以上の栄華の位にのぼるだろうといった「可能性に期待をかけた」と思われる。

光源氏の運命の実体、臣下以上の位が何であるかは、疑問と好奇心を持って物語を読みすすんでいくうちにその意味がだんだん明らかにされてくるのである。すなわち、藤壺事件の深層によって成就される光源氏の栄華は若紫巻の夢占や濡標巻の宿曜の予言で具体化され、藤裏葉巻で准太上天皇に即位し、冷泉帝、朱雀院とともに同列に座することで実現される。

予言は謎でもなく、高麗の相人が不可解のままそう言ったのでもない。若宮の顔に現れた観相をありのまま言ったのである。渤海国人である高麗の相人が准太上天皇のことを知っていたかどうかにかかわらず、予言の内容と准太上天皇を直結してしまうと、読者は『源氏物語』を読む興味が半減するであろう。

なぜならば予言は作者の物語構想での伏線であって、その伏線は大団円で実現されるべきであるから、予言の範囲内に准太上天皇も入ってはくるが、直結はできない。すなわち、高麗人の予言の真意は、前後半を合わせて光源氏の運命の範囲と栄華の可能性を言っているのだと思われる。

3. 夢占い —— 栄華の深層

高麗人によって光源氏の運命が予言されたものの、栄華の可能性だけであって、具体的な形態や実現過程は何も言われていない。この後、光源氏はその名前と同様に栄華の運命物語の主人公として登場し、亡き母御息所と顔かたちが似ているといわれる藤壺が入内すると自然に思い慕うようになる。若紫巻の夢占いによってその深層が露呈される、いわゆる藤壺事件は光源氏栄華の出発点となる基本構造である。この夢占いは勿論高麗の相人の予言の範囲内に入るが、直接その延長線上にあるというより、光源氏の運命物語の進行原理となる藤壺事件の宿運を占ったものである。すなわち、この藤壺事件は光源氏の運命物語において物語を推進させる基本原理となり、底を流れる最も太い線をなしている震源地となっている。

若紫巻で源氏と里帰りしている藤壺が王命婦の取り計らいによって密会した後、次のような贈答を交わす。

（源氏） 見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともが
な

（藤壺） 世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても

（①306）

この「夢の中」、「醒めぬ夢」等の言語表現は苦悩に満ちた二人の関係を暗示しているようである。そして源氏の「夢の中」は次の「おどろおどろしさま異なる夢」を見ることの前触れと考えてよいだろう。源氏と藤壺の密通はこれ以上続けられなくなるが、密通による藤壺の懐妊と不義の皇子（冷泉帝）の出産によって、罪の恐ろしさに苦悩するようになる。

藤壺が懐妊三ヶ月となり、帝にも奏上した頃、光源氏は異様な夢を見る。

中将の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。占者「その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」とのたまひて、心の中には、いかなることならむと思しわたるに、この女宮の御こと聞きたまひて、もしさるやうもや、と思しあはせたまふに、(若紫① 308)

この光源氏の夢は藤壺懷妊のきざしであつた。つまり源氏自身が天皇の父になることと、そのためには「違ひ目」があつて謹慎しなければならないことがあると言う。源氏は秘密の漏洩を防止するため、自分の夢ではないと偽って夢占師に緘口令を下す。

この夢占いを『河海抄』では、

をよびなうとは光源氏天子の親となり給へき兆歟^{キザシ}其中にたかひめありて
とは左遷の事歟^(注28)

とあつて、「及びなう思しもかけぬ筋のこと」を光源氏が天皇の父になることとし、「たがひ目」は左遷、即ち須磨流謫のことを予言したと解される。光源氏の須磨退去は賢木巻で朧月夜との密会の発覚事件という表面的な理由だけではなく、もっと深い裏面的な底意があつたと思う。

夢占いの内容自体は非常に明確であるが、光源氏自身が直接受けた予言としての意義は甚だ大きい。高麗の相人の予言が運命の範囲、可能性を言っているのに対して、夢占いはもっと現実的・具体性をもって、依頼者の本人に直接言われている。

清水好子氏が藤壺事件について、「この世の人生だけしか持たない人間には容易に理解しがたい、倫理の問題を超える力を信じていた人々の話なのである」^(注29)と述べているように、この夢占いの設定意義は人間光源氏が父帝の后との密通による懷妊という倫理の壁をも乗り越える運命物語の主人公としての性格が与えられた点にあると思われる。藤壺も「あさましき御宿世のほど心うし」(若紫卷① 307)とと思っていることから、この密通による懷妊は現世を生

きる人間としてはどうしようもない宿世で、運命だと考えたようである。

ところで光源氏が政治的権力や自分の運命を積極的に開発しようとする目的意識に気がつくのは桐壺院が崩御し、藤壺の宮が出家した後である。桐壺院の崩御後、東宮の後見となり、あれほど恋慕していた藤壺まで出家してしまうと、夢占いの予言を思い出したかも知れない。そして東宮をまもることはもう自分にしかできないと自覚したであろう。ここで見逃すことのできないのは光源氏の運命に対する藤壺の影響力である。つまり藤壺が出家した意図は光源氏の恋慕から逃れるためでもあったが、その深層には光源氏が東宮の後見としての役割をはたしてくれることを自覚させる意識があったのではないだろうか。そうしないと、光源氏、春宮、藤壺自身の三人とも破滅するかも知れないと思ったのであろう。ここに藤壺の分別力と母性的な奥深い思慮がうかがえるのである。

しかし、光源氏は藤壺の出家の意図を充分知っているはずなのに、その行動が慎重ではなかった。すなわち、賢木巻で前からの愛人ではあったが、当時の尚侍の君である朧月夜との密会を重ねているうちに、右大臣に発覚されるという事件を引き起こしたのである。右大臣の報告を聞いた弘徽殿大后は自分たちを軽蔑し、嘲弄したとして光源氏の追放を画策するようになったのである。だが朧月夜事件はあくまでも弘徽殿方が光源氏追放の契機としただけであり、実際に光源氏が須磨退去を決意したのは夢占いの「違ひ目」のためであった。

須磨巻の巻頭で光源氏は須磨退去の決意を次のように考えている。

世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめて知らず

顔にあり経ても、これよりまさることもやと思しなりぬ（須磨巻② 153）

光源氏は官爵をとられ、弘徽殿大后方に官界から弾き出されて、それ以上のわるい事態がおこることを心配している。私は「これよりまさること」が除名処分以上の流罪ということばかりでなく、春宮への影響までを考えた言葉として捉えて見たい。そしてそんな最悪の事態にならないうちに自ら都をはなれ須磨に退去することを決意したのではないだろうか。源氏はすでに除名処分されて、それを流罪になる準備段階だと思っていたであろうし、また自分の夢占いで「違ひ目」があって、謹慎をするように言われていたのである。だから春宮の

安泰を護るため、流罪になる前に自ら須磨退去を決意したのであると思われる。

源氏が須磨の海辺に出て祓をさせる所で、「八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」（須磨巻② 209）と言ったら、暴風雨に襲われる。つまり神は暴風雨で戒めたのであるが、源氏の夢に現れた故桐壺院は「これはただいささかなる物の報い」（明石巻② 219）であると言う。光源氏はいままで弘徽殿大后方の陰謀画策に対して自分の無実を主張して来た。例えば、須磨巻で紫上に「過ちなけれど、さるべきにこそかかる事もあらめと思ふに」（② 164）と言って、須磨に退去することを自分の過失はないが、前世からの因縁によるものだと思っている。しかし、藤壺に対しては、「かく思ひかけぬ罪に当りはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世にだに事なくおはしまさば」（須磨巻② 171）のように除名になったことを思いもよらない罪と考えている。そして「夢占い」通り東宮の安泰即位のために自分が犠牲になって須磨退去をする決意を固めるのである。ただし、密通の秘事は顕現されていないから、内心は宿世の罪障意識を常に持っていたが、表面的には冤罪であることを訴えていた。

この後光源氏は須磨・明石に退去するが、故桐壺院の力によって帰京し、権大納言に昇進、政界の中枢に返り咲くことになる。ここでもう一度「夢占い」と須磨退去の意味を整理して見ると、光源氏一生の大事件であった須磨退去は『花鳥余情』で注しているような高麗人の予言の「乱れうれふること」ではなかった。この須磨退去の構造は若紫巻の夢占いの中の「違ひ目」という言葉で予言されていた。その「違ひ目」というのは光源氏が天皇の父になるための行き違いであって、謹慎しなければならないことであった。つまり東宮を安泰即位させるために光源氏は須磨退去を決意したのであった。

4. 御子三人 —— 予言の実現

濡標巻に冷泉帝が即位して光源氏の夢占いが実現された段階で、もう一つの宿曜の判断がある。光源氏の三人の子供の運命を判断した宿曜の予言は源氏二

十九歳の三月初め頃、明石の君が姫君を出産したという報告を聞いた時に思い出される。

宿曜に「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と、勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた上なき位にのぼり、世をまつりごちたまふべきこと、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを、(中略)宿世遠かりけり。内裏のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言空しからず」と御心の中に思しけり。(濡標卷② 275-276)

光源氏は宿曜の予言と大勢の相人たちの予言などを思い出し、自身の前世からの宿縁を考えている。この夕霧をも含む御子三人の栄華が予言されることによって、光源氏の栄華の実現も確実になったわけである。つまり光源氏の秘密の子が冷泉帝となり、明石の君が姫君を出産したという報告を聞いた後、宿曜の予言が語られる意義は藤壺系の物語に明石の物語が導入される構造が初めて明らかにされたことであろう。明石巻、光源氏が重ねて帰京の宣旨を受けている頃、明石の君は「六月ばかりより心苦しきけしきありて悩みけり」(② 252)とあることから、懐妊の悪阻があったのは源氏が明石を出発する二ヶ月ぐらい前だから、当然源氏も知っていたであろう。帰京した源氏は公私(朝廷の政治と二条院の改築など)とも多忙であるにもかかわらず、「三月朔日のほど、このころやと思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけり」(濡標卷 ② 275)とある。このように明石の君の出産予定日まで計算して宿曜の予言が構想できるのは作者が紫式部という女性だからこそ可能なことであると思われる。

宿曜の予言を思い出した後、源氏が「相人の言空しからず」と思ったのは、現在まで自分の運命を占ったあまたの相人の予言はまちがっていなかったから、これからも予言どおりになるだろうという可能性に期待をかけたからであろう。この宿曜の予言が高麗の相人の予言や夢占いと違う点は、前の二つは光源氏自身に関する予言で、宿曜の予言は源氏の子女に関する予言であることである。そして光源氏は前の二つの予言の一部が実現されているから、この予言を受け

た後はもっと積極的に自分の栄華の予言を成就させようとして努力して、変貌していくのである。

須磨・明石から帰還した光源氏は、特に宿曜の予言を思い出した後、予言を意識し、人生を観照するようになる。復権後の光源氏は藤壺に対する態度も変わり、後見となっている前斎宮の入内について藤壺と相談し計画する。こうして六条御息所の遺言にしたがい、前斎宮を養女として入内させることから、摂関的な政治家に変貌しつつある光源氏の一面をうかがうことができる。

伊藤博氏は濡標巻以後の源氏の変貌を指摘して、

それは源氏の内面の展開、内的必然性にもとづき徐々になされたものとして形象され得ている、とはいいい切れぬようで、多分に予言の要請という外的契機によって、その置かれた位置の要請するエネルギーの方向に身を委ね、急激に過去と切断した気味合いがあったようだ^(注30)

と述べているように変貌することは確かだが、光源氏の自覚、変貌は、賢木巻で藤壺の分別ある出家による衝撃に影響されてからはじまるものだと思われる。そしてこうした光源氏の変貌は内的な目的意識の変化であって、必ず予言や夢占い、宿曜の判断だけにたよっているとは言えないだろう。しかし、濡標巻以後藤裏葉巻まで、三つの予言に支配されながら光源氏の栄華の運命が実現されることは否定できない事実である。そして栄華の運命が実現されるには登場人物の人間関係と努力があってこそ可能となる。

鈴木日出男先生は光源氏の栄華の実現過程の構図として次のように述べておられる。

冷泉帝をめぐる潜在王権的な、また秋好中宮をめぐる准摂関的な、あるいは明石の姫君との摂関的な、それぞれの諸関係を張りめぐらしているのである。これが光源氏栄華の基本的な構図であるといつてよいのだが、とはいえこれが当初から源氏自ら自家の権勢拡充を意図して謀ったのではなかった。むしろ多様な恋の人間関係を通して結果されたものとみられるのである。^(注31)

すなわち、光源氏の王権に対する関わり方を冷泉帝と斎宮、春宮と明石の姫君

によって、潜在王権的、准摂関的、摂関的に把握して、これは「恋の人間関係」の結果であると説いているように、榮華の予言は「恋の人間関係」と予言を意識した源氏の努力、冷泉帝の孝心などによって実現される。

以上のように濡標巻で宿曜の予言を受けた後、光源氏は政治的な人物へと変貌する。すなわち自分の運命を占った予言に対して、それに満足し自然に実現されることを待たないで、自ら実現させようと努力をするのである。彼の摂関的姿勢は絵合巻で前斎宮を冷泉帝に入内させ、明石の姫君を后がねとして養育し、藤裏葉巻で東宮に入内させることではっきりしている。そして「中の劣り」の夕霧は最初から大学にかよわせてきびしく学問をさせ、自分の実力で出世できるようにした。このような光源氏の家父長的な努力は結局彼自身の榮華ともなったのである。

藤裏葉巻で太政大臣の光源氏は明石の姫君の入内が終わり、夕霧も雲居雁と結婚して落ち着いた時、諸事が終わってこれが自分の榮華の頂点とも考えたのか、「御心落ちみはてたまひて、今は本意も遂げなん」(③ 445) と思い、出家を志すのである。だがしかし、高麗の相人の予言で「おほやけのかためとなりて、天の下輔弼くる方に見れば、またその相違ふべし」とあったように、光源氏の宿世は臣下として絶頂をなす摂関や太政大臣にとどまるものではなかったのである。帝王の相でありながら位に即くべきでなく、臣下としても終わらないという高麗の相人の予言が実現されるのは、藤裏葉巻で光源氏が准太上天皇に即位し、(「その秋、太上天皇に准ふ御位得たまうて」③ 445) 六条院に当帝と朱雀院の行幸があつて、同列にすわることであつた。この最高の榮華は光源氏自身の努力だけでなく、薄雲巻で自分の出生の秘事を知った冷泉帝の孝心によって実現されたものであつた。

薄雲巻で藤壺の崩御後、夜居の僧都は冷泉帝に出生の秘密を奏上する。つまり天子が親を知らないから天の咎めがあるという。出生の秘密を知った冷泉帝は煩悶し、自ら皇統乱脈の先例を典籍で調べて一世の源氏が納言あるいは大臣になった後、あらたに親王宣下を受けて帝位に即いた例を確認する。要するに冷泉帝は実父が光源氏であることを知った以上、源氏を臣下の身分においてお

くことができなかったのである。ここに冷泉帝の父を親として待遇しようとする孝心をうかがうことができる。そしてついに譲位したいという意向を漏らしたが、源氏は「及ばぬ際には上りはべらむ」（薄雲② 446）と言って辞退する。冷泉帝が調べた通り一世の源氏が親王から天皇になっても問題はないが、光源氏の場合は不可能である。光源氏が天皇になると親が子の次の天皇に即位することになる。ここにも高麗人の予言は適用される。やはり冷泉帝は外の方法を考えて源氏を待遇しなければならなかった。

藤裏葉巻で冷泉帝はやっと光源氏を准太上天皇として待遇したが、それでも不満足で「世の中を憚りて」（③ 446）譲位できないことを朝夕の嘆きぐさにしている。そして冷泉帝は朱雀院とともに六条院に行幸する。

御座二つよそひて、主の御座は下れるを宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝はなほ限りあるみやみやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなん思しける（藤裏葉③ 451）

冷泉帝が源氏の座を同列にさせることで、光源氏の栄華は頂点に達し、高麗人の予言も実現される。しかし、それでも冷泉帝は規定以上の礼が表面的にはできないことを残念に思うくらいの孝心を抱いていたのである。

5. 結

以上で桐壺巻、若紫巻、濡標巻にある三つの予言は第一部の中でどのように運命物語の構造を枠組し、主人公光源氏の栄華の運命を実現させているかを登場人物の人間関係に注目しながら解釈して見た。

結果的に光源氏は予言に支配されるが、予言が実現されるまでだまって待っていたのではなかった。賢木巻で光源氏は、東宮の安泰を譲るための分別力で出家した藤壺に自覚され、自ら須磨に退去することによって東宮を譲ろうとした。濡標巻以後、予言を意識して変貌した光源氏の摂関的な努力も栄華をもたらしたが、それには限界があって、人臣としての栄華にすぎなかった。最高の栄華は藤裏葉巻で准太上天皇に即位し、帝・院とともに同列にすわることで実現される。

高麗の相人によって予言された光源氏の栄華の実現原理は、そういう光源氏の努力、藤壺の愛情、そして薄雲巻で自分の出生の秘密を知った冷泉帝が光源氏を父として待遇しようとする孝心などの人間関係によって実現されるものであった。そこには予言を作中人物の行動原理としてあくまで実現させようとする虚構物語の論理が働いていると思われる。

注

1. 阿部秋生『源氏物語研究序説』東大出版会 昭和50年 p.954
2. 伊井春樹編『花鳥余情』桜楓社 昭和53年 p.16
3. 森一郎「桐壺巻の高麗の相人の予言の解釈」『青須我波良』第26号 昭和58年7月) pp. 91~92
4. 大野晋編『本居宣長全集』第4巻、筑摩書房 昭和56年 pp. 327 ~328
5. 深沢三千男『源氏物語の形成』桜楓社 昭和47年 p.57
6. 重松信弘『源氏物語の主題と構造』風間書房 昭和56年 p.141
7. 三谷邦明「源氏物語における虚構の方法」(『源氏物語講座』第1巻、有精堂 昭和46年) p.51
8. 玉上琢弥『源氏物語評釈』第1巻 角川書店 昭和39年 p.116
9. 木船重昭「『源氏物語』高麗人の観相と構想・思想」(『日本文学』1973年10月 第22巻) p.33
10. 藤井貞和「神話の論理と物語の論理」(『日本文学』昭和48年10月 VOL.22) p.43
11. 土方洋一「高麗の相人の予言を読む」(『むらさき』昭和55年7月) p.18
12. 高橋和夫「源氏物語 —— 高麗人予言の事」(『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編 第31巻 昭和56年9月原稿受理) p.10
13. 塚原鉄雄「高麗相人と桐壺父帝 —— 源氏生涯の路線定位 —— 」(『中古文学』第28号、中古文学会 昭和56年11月) p.28
14. 日向一雅『源氏物語の主題』桜楓社 昭和58年 p.69 p.75
15. 伊井春樹編『弄花抄』(「源氏物語古注集成8」) 桜楓社 昭和58年

16. 有川武彦校訂『源氏物語湖月抄（上）』講談社 昭和57年
17. 手塚昇『源氏物語の再検討』風間書房 昭和41年
18. 伊井春樹「光源氏の栄花と運命」（『源氏物語の探究』第2輯 風間書房 昭和51年p. 102
19. 伊井春樹「高麗の相人の予言」（『講座源氏物語の世界』第1集 有斐閣 昭和55年）p. 82
20. 池田勉「桐壺の巻における高麗の相人の語をめぐって」（『成城国文学論集』第1集 成城大学大学院文学研究会 昭和44年11月）p. 143
21. 島津久基『源氏物語講話』中興館 昭和5年11月
22. 藤村潔『源氏物語の構造』第二 赤尾昭文堂 昭和46年
23. 秋山虔「隣接諸学を総合した新しいアプローチ、源氏物語（三）」（『国文学解釈と鑑賞』至文堂 昭和42年1月）
24. 坂本昇『源氏物語構想論』明治書院 昭和56年
25. 清水好子「光源氏論」（『国語と国文学』昭和54年8月）
26. 後藤祥子「光源氏像の一面 —— 高麗人の観相をめぐって —— 」（『文学』VOL51 岩波書店 昭和58年3月）
27. 鈴木日出男「主人公の登場 —— 光源氏論（1）」（『講座源氏物語の世界』第1集有斐閣 昭和55年）p. 64
28. 玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』角川書店 昭和43年 p. 261
29. 清水好子 前掲書 p. 6
30. 伊藤博『『落標』以後 —— 光源氏の変貌 —— 」（『日本文学』第14巻第6号、日本文学協会 昭和40年6月）pp. 37～38
31. 鈴木日出男「光源氏の栄華 —— 光源氏論（4）」（『講座源氏物語の世界』第6集有斐閣 昭和56年）p. 36